

莓パニック 1

I c b i g o & S o u

風

fuu



エタニティ文庫

目次

莓パニツク 1 5
～下つ端店員戸惑い編～

書き下ろし番外編
策略は真剣に腹黒く 337

莓パニック 1

～下つ端店員戸惑い編～

プロローグ（憤りの叫び）～執事頭 吉田善一～

黄に色づいた銀杏の葉が、くるくると舞いながらゆっくりと地表に落ちていく。辺りには落ちた葉がぎっしりと敷き詰められ、まるで黄色の絨毯のようだ。

葉の大半を落としてしまった木は、日が傾いてきているためか、なんとも心もとなぞうな風情で太い幹や枝を晒している。

「晩秋なのだなあ……あと少ししたら、もう十一月も終わってしまうのですねえ」

この屋敷の執事頭である吉田善一は、自室の窓辺に立ち、磨き上げられたガラス越しの風景を見つめながら、物思いにふけっていた。

坦々と時が過ぎてゆくことに、このところ、焦りを感じてしまつてならない。

我が主は……このままでよいのだろうか？

善一の主である藤原爽は、多彩な能力、類まれな才覚をもつた人物だ。そして、そのありあまるほどの才能を活用し、気の向くままに様々なビジネスに手を染めている。主の手がけるビジネスは、すべてにおいて順風満帆。

そんなわけで、仕事に関して言えば、なんら心配はしていないのだが……
善一は、顔をしかめて長い息を吐き出した。

——我が主は、女性に関心がなさすぎるのだ。

もちろん、爽様を狙っている女性はいくらでもいる。数年前までは、大切な主が変な女性にひつかかつたら……と、戦々恐々としていたものだった。

まあ、結局はそのような不安など、まったくの杞憂に終わったのだが……

斜に構えた態度、一癖も二癖もある性格。爽様は皮肉なふるまいを、まことに上品にされるおひとなのだ。だが、今ではたまには変な女性に引っかかり、につちもさつちもいかなくなるような状況に身を置くくらいであつてほしいと、逆に願つてしまふわけで。ビジネスは、主にとつて趣味であり娯楽。だから爽様はこのような現状になんの不満もないとおっしゃるのだ。

だがつ、だがつ……。

「それでいいわけがあ、ないつ！」

握り拳をぐぐつと固めた善一は、憤りのままに叫んだ。

一生、ご結婚なさらないつもりではないかと、不安で仕方ない。跡取りが必要だ。絶対に必要なのだ。藤原家を、爽様の代で終わらせるなどあつてはならないことだ。女性にまったく興味がないというわけでは……ないと思うのだが……

やはり、爽様のハートを射抜くくらいの魅力を持った女性が現れないせいなのだろう。はあつ……どこかにいないものか……

あの爽様に、ビジネスよりも興味を抱かせるほどの美の女神のようなお方が……トントンと強めのノックの音がし、善一は憂いを浮かべたままドアに顔を向けた。この時間であれば、料理長の大平松敏雄おおひらまつ としおに違いない。主のための夕食のメニューの相談だろう。

「はい」

「吉田さん、大平松ですが、いまよろしいですか？」

いつもの野太い声が聞こえる。

「ああ、いま行く」

「はい。お願いします」

そのあと、ドアの前から足早に去る気配を感じた。善一は、焦あせることなくゆっくりとドアに近づき、部屋を出る。

今、爽様は宝飾店『ジュエリー Fujiwara』の経営に夢中なのだ。とはいっても、毎日店に顔を出しているわけではなく、木曜の今日はお休みをとっている。だが先ほど、書斎にお茶をお持ちしたところ、爽様はパソコンを開き、お休みであるというのに、やはり仕事をなさっていた。

働き過ぎではないかと思うのだが、爽様は仕事を趣味のようにお考えだから、お疲れになることはないらしい。

大平松との夕食の打ち合わせを終え、次の仕事に取りかかるうとしたところで、電話のベルが鳴る。善一は静かに受話器を取り上げた。

「はい。吉田だが」

「吉田さん、大奥様がおいででござります！」

電話の向こうの焦り声に引きずられて、善一もまたうろたえてしまう。

お、大奥様だと！

またなにやら、厄介事が持ち込まれそうな予感がして、おのずと顔が引きつる。善一はひと呼吸して背筋を伸ばしてから、「わかった」と固い声で答えたのだった。

1 莓の休日 ～莓～

「いちごお!!」

自分の部屋のベッドに寝転んで、ノリのいい音楽を聴きながら漫画を読んでいた鈴木すず君は、突然の母親の怒号ごこうにぎょっとし、ビックーンと身を震わせた。

気づくと、目の前に不機嫌大王と化した母、節子の顔があつた。

「な、な、何？」

跳ぶように身を起こした苺は、ビクビクしながら、しどろもどろに問いかけた。すると、節子は、苺がつけていたヘッドホンを乱暴に剥ぎ取り、床に投げつける。ガシヨツと不穏な音がし、苺は「ああーっ！」と叫んだ。

「お、お母さんったら、壊れちゃうよお」

苺の文句は、母の怒りをさらにあおつたらしい。なんと節子は、右足でヘッドホンを踏みつけたのだ。

「や、やめてえ」

苺はベッドから飛び降り、節子の足元からヘッドホンを救い出した。

「な、なんでえ？」

どうして節子がこんな暴挙に出たのかさっぱりわからず、戸惑いながら問う。

「なんで？　あんたね、いま何時だと思ってんの！」

「はい？」

時計に目を向けた苺は、「あわわっ」と、慌てふためいて叫ぶ。

「あわわっ、じゃないわよ。夕食の支度の時間でしょ、真美ちゃん手伝うの忘れるなんてえ」

「ごめんなさい」

自分の落ち度に、苺はしゅんと萎れた。しお

あーっ、大失敗だ。

母の怒りはもつともだ。実は兄嫁の真美は、いま妊婦さんなのだ。

朝から用事で出かけた節子は、夕方まで帰つてこられないというので、苺は身重の真美の手伝いをすることになつていたのに……

「ほら、さつさと下りてらっしゃいよ」

「あいあいさー」

返事をした苺は、節子に遅れまいと部屋から出た。そして節子を追い越し、先に階段に向かう。

「ちょ、ちょっと苺、あんた落ちないでよ」

心配する節子の呼びかけに「あーい」と答え、階段をあつという間に駆け下りた苺は、その勢いのままキツチンに飛び込んだ。

「真美さん、ごめんねえ」

真美の姿を捉えた瞬間、苺は謝った。

「い、苺さん。そんなに慌てなくとも、大丈夫ですよお」

真美は少し焦った風に、右手に菜箸を持ったまま、両手を振る。

兄嫁の真美は、性格よしの器量よし。すらりと背が高く、スタイルも抜群。いまは妊婦なので、お腹はぽこんと膨らんでいるけど……それはそれで素敵だ。とりあえず、まだ夕食の支度は終わっていないようで、苺はほつとした。

「真美さん、わたし、何をすればいい?」
挽回を図るべく、苺は兄嫁に尋ねたのだった。

「うん、うまい。やっぱり真美は料理が上手だな」

鼻の下を伸ばして、妻の料理を褒めまくっているのは、苺より五つ年上の兄の健太だ。兄夫婦は昨年の秋に結婚したばかりの新婚だ。

いわゆる職場結婚というやつなのだが、真美に言わせると、健太は社内一かつこよくて仕事のできる、超エリート社員らしい。

妹には横暴な兄だが、妻には甘い。ふたりが結婚してから、それまで知ることのなかつた兄の一面に触れるたびに、苺は度胸を抜かれたものだった。

「母さんが仕事に出てるから仕方ないとはいえ、ここそこ、かなり大きくなつたし……そろそろ家事は辛いんじゃないかな?」

健太は真美のお腹を見つめ、心配そうに言う。自然と家族全員の目が自分のお腹に集まってしまったものだから、真美は恥ずかしそうに頬を染めた。

「苺がまともな物を作れればねえ、この子に任せんんだけど……」

パクパク食べながら、節子がちらりと苺を見る。目が合った苺は、さりげなく視線を逸らした。

残念なことに、苺は料理が苦手なのだ。レシピ通りに作れば、それなりにちゃんとしたものができるはずだと母は言うのだが……なぜか破壊的な味になる。これは、苺本人にも解明できぬ謎である。

「苺の料理は食べられたもんじゃないからなあ」

父の宏はのんびりと事実を口にする。おかげで、苺は兄と母から失笑を食らつた。

「ほんと、この子には、一生お嫁の貰い手なんかないわね」

悪うございましたね。嫁の貰い手なんて、ありそうにございませんよ。

苺は唇を突き出し、心の中で呟いた。

歯に衣着せぬ毒舌も、血の繋がった家族だからこそ。何を言われたところで、いまさらなんてことない。

「なあ、いちごう。お前、本気で料理学校に通つたほうがいいんじゃないかな? いまのままじゃ、マジで結婚できないぞ」

真剣に妹の身を案じる健太の発言は、罵られるよりこたえた。
「わたしの名前、いちごうじゃないもん。苺だもん」

視線を向けずに文句を返し、箸で摘まんだおかげを口に放り込む。

健太は、苺のことを幼い頃から『いちごう』と呼ぶ。漢字で書くと、『一号』だ。

つまり苺は、健太の子分一号というわけなのだ。

まったくいい加減、妹のことを『いちごう』なんて呼ぶのはやめてほしい。

苺はロボットでもサイボーグでもないってんだ。

「料理学校ねえ……行つたところで貰い手がなさそうだし、ここはやっぱり定職に就くべきだと、お母さんは思うけど」

その話題を持ち出され、顔が歪んでしまう。

苺は今年の三月、専門学校のデザイン科を卒業した。デザイン関係の職に就きたかったのだが、挑んだ会社はすべて不採用。結局、いまだにフリーターの身。

なんとか定職に就こうと就職活動は地道に続けているが、うまくいっていない。

健太からは、デザイン関係にこだわるからだと指摘されているのだが……とにかく、このままでは学費を出してくれた両親に申し訳ないし、立つ瀬がない。

ご飯が終わったら、また履歴書を書くとしよう。

夕食の準備を手伝うのが遅れたお詫びに、後片づけを一手に引き受け、苺は自分の部屋に戻った。

散らかった部屋を見て、思わず顔をしかめてしまう。片づけようと思つたが、「あーあ」と声を上げながら、ベッドにどさりと寝転がる。

ほんと、ちゃんと定職に就かなきやなあ。

天井を見つめて、思案する。

やはり、デザイン関係にこだわるのをやめるべきなのか？

跳ねるように起き上がった苺は、机を前にして座つた。

いま君がやらなければならないことは、履歴書を書くことだよ、苺君。それがなければ面接にさえ辿り着けない。

とはいっても、面接はすでに両手の指には収まらないほど受けたのだが、受けた回数と同じ数の不採用通知が届いた。それを思うと、面接に挑むのはしんどい。けど……イチゴヨーライトを食べるのにスプーンが必要なのと同じくらい、就職活動に面接は不可欠だ。

まだまだ記入する欄が残っている履歴書を見つめた苺は、ペンを置いて立ち上がった。ちよいと、気分転換しよう。明るい気持ちで書いた履歴書のほうが、きっと良い結果を招くだろう。

ルンルンとスキップを踏みながら階段を下り始めた苺は、スキップの足を踏み外し、ドドドッとものすごい音を響かせ、階段から滑り落ちた。よたよたしながらキツチンに辿り着いた苺は、イチゴヨーグルトとスプーンを手に取り、痛むお尻を撫でつつ階段を上がった。

イチゴヨーグルトは、いつもと同じようにおいしかった。階段を踏み外し、たとえお

尻に痛みが残っていたとしても、しあわせをもたらしてくれる食べ物だ。

明日もアルバイトは休みだし、ショッピングセンターに行つてまたイチゴヨーグルトを買ってこなきや。そのついでに、いつも宝飾店に寄つて、キラキラたちも眺めて来るといしよう。

苺は、机の上に置いてある赤い宝石箱に手を伸ばし、蓋を開けた。

この宝石箱は、何年か前に母親からプレゼントされたものだ。膨らみのある蓋のてっぺんに、イチゴの飾りがふたつくついている。ほんとは、みつついていたのだが、ひとつは取れてしまつたのだ。取れたイチゴは、そのうち接着剤でくつつけようと思つて、宝石箱に入れたまま。

宝石箱の中で、唯一本物の宝石のついたネックレスを、苺はそつと手に取つた。

これを購入したのは一週間前の日曜日。明日行く予定の、ショッピングセンターの中にある宝飾店で買ったのだ。ガラスケースの中には、ほかにもいっぱい並んでいたのだ

が、これはまるでイチゴみたいだつたから一瞬でハートを射抜かれて、衝動買いしてしまつたのだ。

それ以来、出かけるときはいつも身につけている。これをつけていると、ほわほわつと楽しい気分になれるし、何かいいことが起きる気がするのだ。

小さくたつて本物のルビーだもんね。なのに、たつたの三千円。もちろん苺には大金だし、財布は軽くなつてしまつたけど……後悔はしていない。

けど、三千円とは思えないよね。
ネットレスのルビーの粒をほつべに押し当て、苺は至福の笑みを零す。すると彼女の左頬に、ぷくっとえくぼが浮かんだ。

翌日、日曜日の午後、ベッドに座つてちつちつなガマグチ型の財布の中を覗き込んだ苺は、肩を落とし「はあっ」と、息を吐き出した。次の給料日までに最低限必要な費用を持ち金から差し引くと……イチゴヨーグルトはせいぜい一パックしか買えないな。ネットレスを買つちやつたからなあ。

イチゴヨーグルトだけは、毎日かかさず食べたいのに……昨日、最後の一個を食べてしまつたから、買つてこないと今夜のお楽しみはなしということになつてしまふ。今日つて、特価とかじやないかなあ？

よし！ まずは広告の確認だ。

苺は部屋を飛び出し、ドダダダダッと階段を駆け下りた。昨日、足を滑らせたことなど、すでに頭から消え去っている。

「苺！ 静かに下りなさい。階段の板が抜けたらどうするのっ！」
居間のほうから節子の怒号^{どこう}が飛んできた。

騒々しい音を響かせた犯人を苺だと決めつけている母に対して、苺は唇を尖らせながら居間にに入った。

「わたしじゃないかも知れないじゃん」

「はあっ!? あんたじやなかつたら誰だつてのよ？」

苺は居間に揃^{そろ}つていてる顔ぶれを見て、あひやつと眉を上げた。鈴木家の全員が勢ぞろいしている。

「いちごう。お前、やつぱ馬鹿だな」

健太から小馬鹿にするように言われて、苺はほっぺたを膨らませた。

「わたし、広告見たいんだけど」

「ここにあるぞ。ほれ、苺、こっち来て座れ」

やさしい父の言葉に、苺は笑みを浮かべてソファに座つている宏の隣に腰かけた。
広告を手に取った苺は、さつそく特価のイチゴヨーグルトを探した。

「イチゴヨーグルトなら、ショッピングセンターが安いわよ」
節子の情報に、苺は笑みを零した。

「ほんと?」

娘に対して小言が多く、一見厳しそうな母だが、実は苺のことを誰よりもわかってくれている。

「お母さん、サンキュー」

弾むようにお礼を言つた苺は、ショッピングセンターの広告に目を通した。
イチゴヨーグルト三連パック、九十八円を確認し、思わずガツツポーズする。
よっしゃ！」

「ほんじゃ、わたし、行つてくるよ」

「苺さん、買い物に行くのなら、わたしたちと一緒に車で行つたら？」

「ううん。いいのいいの。苺は愛車で行くよ。近いし。真美さんたちも、ショッピングセンターに行くの？」

「わたしたちはどこでもいいの。食品の買い出しに行くだけだから」
「真美さん、気をつけないと……」

にやにや笑いながら、節子は忠告するように真美に声をかける。
母がにやついているわけも、忠告の意味も、苺は承知済みだ。

「母さん、別にいいだろ！ 必要なもの買つてんだから」

健太は顔を赤らめて声を荒らげた。そんな健太に節子はしたり顔を向ける。

「そうよねえ。この間あんたが買つてきたおもちゃとか、まあ、あれも二年後くらいには必要になるわよね、きっと」

両親と妹の失笑を買い、健太はさらに顔を真っ赤にして睨み返してきた。

実は健太は買い物に行くたびに、赤ん坊のための品を買い込んでくるのだ。健太と真美の部屋は、すでにそれまでいっぱいになつてているんじやなかろうか。

「それじゃ、行つてくるねえ」

苺はびょんと立ち上がり、居間を出た。

「もう、広告広げたまんま！」

またもや母の小言が飛んできて、苺はペロリと舌を出しつつ、自分の部屋に戻つた。

クローゼットを開けた苺は、迷うことなくいつものセーターを掴んだ。彼女のクローゼットには、たいして服はぶら下がつていない。バイト代だけの暮らしでは、服もそろそろ買えない。母に生活費を渡すのは当然だし、貯金だってしたい。

だからまた母と一緒に買い物に行つて、リーズナブルな値段の服……特価品とも言う……を買つてもららうくらいだ。

いまのところ間に合つてはいるけど……新しい服も欲しいよねえ。

やっぱり、なんとかして就職先を見つけなければ……正社員になれるようにならう。正社員として就職できたら、服を買えるようになるし、家族にも色々買ってあげられる。

うん、就活頑張ろう！

セーラーをベッドの上に置いた苺は、今度はタンスを開けて茶色のスカートを取り出した。これは真美に貰つたものだ。

身支度を終えた苺は、最後に宝物のルビーのネックレスをつけた。これでイチゴヨーグルトが売り切れてて、泣く泣く帰るハメになることはないだろう。

だつて、こいつは、苺の幸運のアイテムだもんね。

苺は鏡を覗き込み、ネックレスの赤いルビーを見つめた。自然と顔が綻ぶ。バッグを抱えた苺は、ウキウキしつつ部屋を出た。

愛車のピンクの自転車に颪爽^{さつそう}_{まだが}と跨つた苺は、ショッピングセンターに向かつた。

十一月も下旬になり、風はそれなりに冷たいが、今日は日差しがあつてまずまずのサイクリング日和だ。

ショッピングセンターの駐輪場に自転車を停め、いそいそと店内に入る。日曜日といふこともあって、お客さんがいっぱいいる。

一番の目的は特価の三連パックのイチゴーグルトだが、その前にウインドウショッピングを楽しむこととする。

冬物の素敵な服で溢れているショッピングを横目にしつつ、花屋の変わり種の植木鉢を観賞し、三百円均一ショップ、おもちゃ売り場、本屋を一通り回った。このショッピングセンターは、とにかくテナントの数が多いから、見て回るだけでも遊園地のようにならう。

通りかかった宝飾店にちらりと視線を向けた苺は、店員とばっかり目が合ってしまい、そそきと素通りした。

この宝飾店は、すぐに店員が近づいてくるのだ。眺めるだけの客である苺は、まったく気が休まらない。単に眺めて楽しみたいだけなのに……近づいてこられたら、逃げ出しあくなる。

その点、あの宝飾店は違うんだよねえ。

苺がいま向かっているのは、こちらから呼びかけない限り店員は近づいてこない、なんとも気楽に立ち寄れる宝飾店なのだ。

もちろん、苺がいま首に下げている、このルビーのネックレスを買ったお店だ。苺はスキン십을踏みながら、通路を進んでいった。

2 待ちびと來たる ～爽～

今日の客の入りも、ますますだな。

店のレジに立った爽は、店内を満足しつつ眺めた。そして、手元にある分厚いファイルを捲る。

このファイルには、彼が手がけている様々な事業の最新の報告書がまとめられている。この報告書を作成しているのは、彼の片腕である藍原要だ。信頼に足る部下で、ミスをしたことなど、かつて一度もない。もうひとりの腹心の部下である岡島怜と共に、常に爽につき従っている。

ふたりとも有能で性格がいい。性格がいいといつても、やさしいとか、思いやりがあるということではない。気まぐれな爽の行動に造作なく対応できるほど、柔軟性があり機転が利くということだ。

〔爽様〕

要から呼びかけられ、爽はファイルから目を離さずに「なんだ?」と答えた。
「そもそも休憩になさいませんか? すでに三時を十分ほど過ぎておりますが」

控えめに促され、思わず顔をしかめてしまう。

実は三時ちょうどにも、同じことを言われていたのだ。だがそのときも爽は、スタッフフルームに下がらなかつた。

「今日は……喉も渴いていないし……休憩の必要はない」

さも報告書の確認に集中しているかのように答えたものの、要には何もかも見透かされているようで気まずい。

「そうですか。わかりました。それでは、怜を先に休憩させましょう」

「ああ、そうしてくれ」

半分上の空といった感じを装つて、爽は返事をした。要はその場を離れ、店頭に立つている怜に近寄る。怜がスタッフフルームに下がり、要が店内をゆっくりと回っているのを確認してから、爽は店の前の通路に視線を向けた。

来ないな……

昨日も来なかつたようだから、今日は来るかと思ったのに……やはり来ないのだろうか？ もしや、二度とやつてこなかつたりするのでは？

そう考えた途端、少々胸が疼いてしまつた爽は、自分にむかついた。

別にどうだつていい。ただの客なのだからな……

でも、ずっと観察してきたから……やはり来ないと、どうにも気になつてしまつたのだ。

もうどのくらいになるだろう。半年……というところだろうか？

いつからこの店に来るようになつたのかは把握していないが、爽が存在を知つたときから、彼女はほぼ毎週やつてきている。必ず土日のどちらかだ。

仕種やら行動が、妙に面白いのだ。爽はいつの間にか彼女の来店を心待ちにするようになつっていた。

彼女が必ず眺めるのは、要のアイディアで設置した、三千円均一の品を陳列^{ちんれつ}しているショーケース。

三千円均一だけでなく、一万円均一と五千円均一のショーケースも並んでいるのだが、彼女が見るのは三千円均一のそれだけだ。

実は、要がこの提案をしてきたとき、さすがに三千円均一といふのは低価格過ぎて、『ジュエリー Fujiwara』にはふさわしくないと爽は反対した。だが要は、三千円均一をなくしては粗いが外れてしまうと説得してきたのだ。五千円では少々高くて若い購買層は手を伸ばしにくいけれど、三千円ならば、気軽に購入できるのでは、と。

それならばまずは三ヶ月限定で試して、状況をみて判断しようということにした。結果は悪くなかった。確実にお客が増え、売り上げも増した。

そして彼女がやつてくるようになつたのだ。三千円均一のケースにしか興味を示さない彼女が。

彼女は週に一度土日のどちらかに来店するのだが、店に入つてからの動作がまずおかしい。店に近寄ると、いささか拳銃不審に辺りを窺い、それからそろりそろりとにじり寄つてくる。そして三千円均一のケースに張りつくと、楽しげに中を覗き込む。自分が他の客の邪魔になつていなか、店員が近づいてこないか、時々周囲を見回しながら、なにやらケースに向かつてブツブツ言つているようだつた。

彼女が何を言つてゐるのか気になつてならなかつた爽は、そつと後ろに回つて耳をすませた。そうしたら、ジュエリーのひとつひとつに小声で話しかけていたのだ。そう、こんな風に……

『おーおー、新顔。小粒な桃色ちゃん、かつわいいよ。うんうんよく来たねえ。いい場所に飾つてもらえてよかつたねえ。あつ、グリーンのこの子がはしつこにいつちやつたかあ。で、でも大丈夫だよ。はしつこつてのは案外目立つんだからね、落ち込む必要なんぞないよ』

もう噴き出さないようにするのに必死だつた。

だが、ケースの中の商品すべてを記憶してくれてることは驚きだつた。ひとつひとつに声をかけて称賛したり励ましたり……

その割には、一度も購入してくれたことのないお客様ではあつたが、ケースの中の商品たちにいい影響を与えてくれているような気がした。そしてそれを証明するかのよう

に、三千円均一の商品たちは驚くほどよく売れていた。彼女は我知らず、スタッフ以上に働きをしてくれていたといえる。

そんな彼女に興味を抱いた爽は、色々と試してみた。一列置きに新しい品に入れ替えてみたり、ひとつだけ残してあとは全部新しいものにしてみたりして、彼女の反応を楽しんだ。

正直、もう眺めているだけでは物足りなくなつてきている。

少し前のことになるが、近づいていつたら慌てて逃げ去つてしまつたため、それ以降、声をかけることは断念した。もちろん要と怜にも、決して声をかけないよう申し渡した。忙しいときに応援に呼ぶスタッフたちには、要経由で命じた。

せつかくのお楽しみを、みすみす失いたくないからな。

まあ、あれだ……私にとって、あれは動物園のパンダ的存在だな。いつもすっぴんだこの店のジュエリーを眺めに来るくらいなのだから、おしゃれに興味がないわけではないだらう……

あーつ、思う存分、弄りたい。弄り倒したい。

考えれば考えるほど、自分の思うようにならないことに苛立つてならない。あまり気は進まないが、部下に身元を調べさせるか？せめて名前が知りたい。

頭の中で思いつく名前を、冴えない彼女に当てはめては、これは違うなと首を横に振る。そんな意味もない作業に夢中になっていた爽は、要が歩み寄ってきたのに気づき、顔を向けた。

「爽様。大奥様より、またお電話がございました」

その報告に、眉を上げて「それで？」と聞き返す。

「はい。爽様の指示通り、お答えしておきました」

その返事を聞いた爽は、祖母の羽歌乃^{ねのか}を思い浮かべてくすりと笑つた。

昼食会という名の見合いに、いつものように爽を巻き込もうとしていた祖母だったが、彼にドタキヤンされ、今頃、火を噴いて怒り狂つてゐるだろう。この店に怒鳴り込んだりしないように、手は打つておいた。祖母は、彼がここにいるとは思っていない。吉田に足取りがつかめなくなつたと伝えろと言つておいたのだ。そして要と怜にも、祖母から連絡があつたら、ここにはいないと伝えるよう、命じておいた。

罪の意識を感じる必要もないだろう。悪いのは、勝手な計画を立てて彼を巻き込もうとした祖母なのだから。

〔爽様〕

声を潜めて再び呼びかけられる。

「何があつたのか？」

同じように声を潜めて問いかけると、要がさつと顔を向ける。要の視線の先を辿つた爽は、ハッと目を見開いた。

——冴えない彼女だつ！

3 激しく誤解（苺）

宝飾店に辿り着いた苺は、三千円均一のショーケースに近づいていった。

店には苺の他にもお客様が数人いて、店員に相手をしてもらつてゐるひともいる。宝物のルビーのネックレスのお仲間を眺めた苺は、思わずむふつと笑う。

先週の日曜日まで、この子もここにいたんだよねえ。

いつものように新顔がいくつかお目見えしている。このお店、マメに商品を入れ替えているようなのだ。

新顔たちを新入生を迎える気持ちで眺め終えた苺は、五千円均一のケースに目を向け

てみた。

これまで三千円均一のケースしか見てなかつたけど……あつちの連中も、ちょっとくら眺めてみようかな？

おおおっ！ 二千円プラスされただけなのに、ずいぶんと石が大きいし、チエーンもしつかりしてゐる。おまけにデザインも凝つてて素敵だし……

「いつもありがとうございます。どれかお気に召したもののはございましたか？」
ガラスケースの中のジュエリーを、一個一個確認するように眺めていた苺は、よく響くソフトな低い声を耳にし、ぎょっとして顔を上げた。

苺に微笑を向けるこの男性は、たぶん、ここのお店員なのだろう。

背が高く、すらりとしていて、スーツが滅茶苦茶似合つていた。そして、その身から光を発しているかのごとく、眩しい。店のライトが全部彼に向いているのではないかと、マジで疑つたくらいだ。

こ、このひと、ほんとにただの店員さん？ やたら高貴な匂いがするつていうか、まるで貴族つて感じだ。

突然胸に異変を感じ、驚いた苺は思わず胸を押さえた。

なんか知らぬが、胸がブルブルッと震え始めたのだ。

ありりつ？

まるでマナーモードにしている携帯が鳴つてるみたいに思えるんだけど……ま、まさかだよね？

いくら苺がおつちよこちよいでも、ブラの中に携帯電話など入れてはいられないはずだ。
おかしいなあと思いつつ、目の前の店員に意識を向けた苺は、びっくりした。

オーラを背負つてゐる高貴で貴族っぽい店員の視線が、まっすぐに苺の首元を捉えている。

えつ、えつ、えつ？ な、な、なんだ？ このひと、もしや首フェチとか？
無意識に自分の胸をまさぐつていた苺の手は、当然だが、携帯など探し当てたりはしなかつた。

け、携帯、バッグの中だよね？

彼女はバッグの口を開けて、中を覗きこみ、携帯電話がいつものように転がつてゐるのを確認した。

焦つて携帯電話を引っぱり出したせいで、ポケットティッシュと、白い封筒が落ちた。
貴族のようなそのひとは、さつと屈んでそれを拾つてくれる。

「ああ、そうでしたか」

お礼を言おうとした苺は、きょとんとした。

その言葉には、どうしてかひどく納得したような響きが感じられたのだ。

な、なんだ？

「早く言つてくだされば……さあ、こちらへ」

店の奥へと促され、苺は困惑した。なんのことやらさっぱりわからない。

「え、え、あ、あの……」

「履歴書ですよね？　これ？」

店員は、手にした封書を苺の前にかざして言う。

確かにそいつは、昨夜苺がせつせと書いた履歴書だ。いついかなるときでも、正社員募集の求人に対応できるようにバッグに入れておいたのだ。

「面接においてだったんですね。わかりました、すぐ始めましょう」

「へつ？ め、め、め、面接？ な、なんか激しく誤解されたようだ。」

これは、とんでもないことになつた！

並んで歩いている店員を、苺は恐れの眼差しで見つめた。その右手には、苺が書いた履歴書が握られている。

違うんです！

そう言つたかったが、口を挟む隙も与えられなかつた。

4 飼染みのない反応　（爽）

口元に、どうにも笑みが浮かんでしまう。

こんな事態になるとはな。

いま、爽の隣には、彼の興味を引いてならない例の冴えない彼女がいて、スタッフルームに向かつて並んで歩いている。声をかけたくてもかけられず、眺めているしかない状況にさんざんいらしていたのに……

爽は手にしている封書を見つめ、胸の内でやついた。

まさか、彼女が履歴書を持っていて、しかもまるで私にチャンスを与えるように、バッグからそれを落としてくれるとは……

にしても、自分がいなかつた先週の日曜日に、彼女がネックレスを購入していたなんて……思いもよらないことだった。

彼女がやつてきたのを確認したところで、要は、たつたいま思い出したというように、そのことを報告してきたのだ。

どうしてもっと早く報告しなかつたのかと文句を言つたら、『報告を望まれていたの

ですか?』と、ひどく意外そうに聞き返された。

『まったく、要のやつめ……相変わらずいい性格をしている。

私が彼女に対して、並々ならぬ興味を抱いていると気づいているくせに……

とにかく、彼女がネックレスを購入したと知り、爽はそれをきつかけにして、声をかけてみることにした。

いままで話しかけた途端、飛んで逃げてしまうだろうと思つてためらつていたのだが、購入してくれたのならば、近づいても大丈夫なのではないかと考えたのだ。

彼女に対応したのは、要でも怜でもなく、応援のスタッフだったらしい。そのとき要是スタッフルームにいて、用事を済ませて店内に戻つてきたら、彼女がレジに立つていたのだそうだ。

『驚きましたよ』と言いながら、要は少しも驚いた表情など見せずに報告した。

もどかしくてならなかつた。できることなら、この目で一部始終を見たかったのに。

彼女がどんな風に店員に声をかけたのか……購入するネックレスを決めてから店員を呼んだのか……それとも、店員にどれがいいだらうかと相談したのか……

あー、腹立たしいな。

彼女の対応をしたスタッフの首を、この手で絞めてやりたい衝動が湧き起ころ。

要ときたら、彼の考えを察知したのか、スタッフの名前を言わなかつた。

まあ、知らないほうがいいのかもしれないな。首を絞めないまでも、遠い異国の支社にでも飛ばしたくなるかもしれない。

『さあ、どうぞ』

スタッフルームのドアを開け、爽は彼女に入るよう促した。

首元のネックレスに、また目がいつてしまふ。小さなルビーのネックレス。

実は少しだけ意外に思つた。彼女の雰囲気からいえば、淡い桃色とか、水色とかを好みそつだが。

『あ、あのっ……その……』

彼女が動搖した声を上げ、爽は考えにふけるのを止めて氣を引き締めた。さつさとこつちのペースに引きずりこんでしまつたほうが都合がよさそうだ。まずは、そう簡単に逃げられないように、スタッフルームに閉じ込んでしまおう。

爽はドアの前で動かない彼女の背中にそつと手のひらを当て、部屋に押し込んだ。

『では、そこに座つてください』

ドアから一番遠い椅子を指し、爽は彼女に言つた。彼女は小動物のように怯えながら、椅子に浅く腰かけた。爽はドアに近い椅子に座り、封筒から履歴書を取り出した。

ここ最近感じたことがないくらいの胸の高鳴りを覚える。

彼女の名前がついに……

履歴書を開いた爽は、名前の欄にさつと目を落とした。

鈴木……苺。い、ち、ご……?

思わず、履歴書を凝視していた爽は、ハッと気づいて顔を上げた。

彼女はもじもじしながら、視線をあちらこちらへ、さまわせている。

『苺』

試しに、心の中で呼んでみる。

うむ。苺という名は……案外悪くないな。パツと見ると冴えない彼女だが、こうして間近に見ると……そう悪くない。唇の形もいいし、肌も白くて綺麗だ。

落ち着きなく動いていた瞳がこちらに向けられそうな予感がして、爽は彼女から視線を逸らし、再び履歴書を読む。

彼女が自分を見つめている気配を感じ、妙にそわそわしてしまうが、爽はそつと彼女に視線を戻した。

彼が手にしている履歴書を見ている。どうやら少し落ち着いたようだ。

「鈴木苺さん」

「は、はいっ」

面接官らしく呼びかけると、鈴木苺は慌てふためいたように返事をし、ぴょこんと飛び上がった。そして、焦つて姿勢を正す。その一連の反応に笑つてしまいそうになり、爽はぐつと堪えたが、どうにも口元がピクピクと震えてしまう。

やはり、面白いな。仕種ひとつで、これほど笑いを誘われるとは……
笑いを堪えている彼に気づいたのか、彼女は頬を真っ赤に染めてうつむいてしまった。
赤く上気した顔はずいぶんと可愛らしい。名前のせいか、イチゴを連想してしまった。
さて、さつさと面接を進めたほうがよさそうだ。

「私はこの店の店長で、藤原と申します」

「あつ、はい。よつ、よろしくで……おつ、お願ひする……で、です」

おやおや、どうやらずいぶんと上がつてしまつていいようだな。ならば、あまり緊張させないように、もつとソフトな対応をしたほうがいいかもしれない。

慎重に対策を練りつつ、履歴書に目を通す。

おや? 就職活動中の学生なのかと思つていたら、すでに働いているようだ。
転職を考えているのだろうか?

「専門学校を卒業されて、いまはこの会社にお勤めされているわけですか?」
紙器製作所と書いてあるが、どんな仕事なのかピンとこない。

「は、はい。アルバイト……なんですけど……」

「アルバイト？」

「はい。その……正社員では、なかなか雇つてもらえないで、
彼女は恥じらうようくに言う。

それで、就職活動をしているというわけか？ 自分にとつては、嬉しい状況だ。

「そうですか。いまの仕事は？ すぐに辞められるのですか？」

その問い合わせに、彼女はごくりと唾を呑み込んだ。

「せ、正社員で雇つていただけるところがあつたら、いつでも辞めるで……ま、ます」

辞めるで、ます？ 彼女の言葉が頭の中で再生され、危うく噴き出しそうになる。

「いまの仕事に不満が？」

噴き出す前に、爽は急いで次の質問をする。

「いえ」

彼女は顔の前で手を横に振つて、否定する。

つまり、不満はないということか？

「仕事はとつても気に入つてゐんです。お菓子の箱を作つてる工場で……綺麗な紙をハサミで切つたりとか……まるで工作の時間みたいな仕事で、楽しいんです」

表情から窺える限り、いまの仕事をとても気に入つてゐるようだ。

バイトではなく、正社員として雇われていたら、転職したいなどとは考えなかつたに違

いない。

ラッキーだつたな。

だが、彼女はたまたま履歴書を落としただけであり、この店で雇つてもらおうと思つて
いたわけではない。履歴書を拾つた自分が、強引に面接へと引きこんだのだ。

社員として雇うのならば、ここに勤める気はあるだろうか？

宝飾店の店員という仕事を嫌がつたりしないだろうか？

それに、爽自身にも、経営者としての理念がある。ここで働く気があるのならば、心の内で激しくぶつかり合う。
がこれまでスタッフに求めてきたのと同じ能力を彼女にも求めたい。

爽個人の願望と、経営者としての信念が、心の内で激しくぶつかり合う。

「宝石には興味がおありですか？」

爽は氣を取り直して質問した。彼女は、困つたように顔をしかめる。

これは……マズイ質問をしてしまつたか？

「あ、あのっ」

何か言おうとしたようだが、口を開いたまま彼女は固まつてしまつた。

爽はこの場を和ませようと彼女に話しかけた。

「そのネックレスは、ここでお買い上げいただいたものですね」

彼女がハツとした表情をし、次の瞬間、大きく微笑んだ。

爽は思わず息を止めた。

「口元近くの左頬に現れた可愛らしいえくぼ。それを目にした途端、胸がキュンとし、このまつたく馴染みのない反応に、爽はどきりとした。

「は、はい。宝石にはあまり興味なくて、やっぱり高いし……」
「これつけてると、ウキウキするんです。なんかわかんないんですけど、元気をもらえるんです」

「で、でもですね、ここ三回均一なら買えるなって」
「そう言って、またにこつと笑う。再び現れたえくぼに、心を持つてゆかれそうになる。

「これつけてると、ウキウキするんです。なんかわかんないんですけど、元気をもらえるんです」

その言葉を聞いた爽の胸に、細かな震えが走った。
ちよつと前まで、興味の対象でしかなく、冴えない彼女だとばかり思っていたのに……

この笑顔、左頬のえくぼ……そしてなにより、いまの言葉が、爽の魂に衝撃を与えた。

「それは嬉しいですね」

そう口にし、爽は口元に笑みを浮かべた。

「そ、そうですか？」

「ええ」

欲しい……彼女が……鈴木爽が……どうしても欲しい。

「ええ」

5 これって何？ な面接 ～苺～

藤原と名乗った貴族のような店長の微笑みには、少しばかり苦味が含まれていて、苺のハートをときめかせた。

ビターチョコみたい。それに、このひと、男のひとなのに、驚くほど綺麗な手をしてる。指も長くて……その指が動くさまは、なんともいえない色気があって……

「土日祝日も、仕事をしていただけますか？」

指を凝視していた苺は、その質問にハッと顔を上げ、あたふたと姿勢を正した。

「は、はい。もちろんしていただけ……い、いえ、するで……し、します。できます」
焦つて言い間違えてしまい、さらに墓穴を掘りまくり、苺は顔をしかめた。

敬語をうまく使えないことは、よく指摘される。だが、うまいことしゃべろうと思えば思うほど、おかしなことになるのだ。宝飾店なのに敬語も満足に使えないのでは、当然不採用だろう。

ああ、もうこの面接も終わりが見えちゃったな。

ではないのに、これで不採用になつたりしたら、気まづくてもうここには来れなくなりそうだ。

「そうですか。……しばらくは準社員として働いていただくことになりますが、よろしいでしょーか？」

「藤原店長は申し訳なさそうに言う。苺はただただ驚いた。

そ、それって……？ 敬語が使えないせいで、この面接も不合格だと思つていたのに……

採用？ 面接、合格？ 合格なの？

「は、はいーっ」

ついつい、声が裏返る。

お、おちつけ、おちつけえ、苺おー。

「給料は月に二十五万。ボーナスは夏と冬、それぞれ二ヶ月分程度ということです」

苺はその説明に目を丸くした。いや、冗談でなく、目玉が飛び出たかもしれない。ボーナスという言葉に、心が舞い上がる。

ボ、ボーナス！ ボーナス！ なんていい響きなの。

頭の中で、八分音符がぴょこぴょこ跳ね回る。

給料の二ヶ月分ということは……一回、二、三、四、五じゅう……まん？ まつ、マジでえ？

「住居も、この近くの物件を提供できますが」

「はいっ？ ジュ、じゅうきよ？」

意味がわからず、苺は目をパチパチさせた。

「賃貸のアパートですよ。こちらが提供する住居であれば、私のほうで賃貸契約をし、家賃もこちらで振り込みます」

もう絶対、苺の目玉は飛び出たに違いない。びっくり仰天、ゴボウ天。

「そ、そんなおいしい話、あるですか？」

あまりに突飛な話に、思わず飛びつくように口にしてしまう。

「は？」

藤原は呆気にとられていたが、その後、上体をねじつて口元に手を当て、くつくつくつと笑い出した。

おいしい話という表現は、そんなにもおかしかったのか？

「おいしい話、受けますか？」

改めて真面目な口調で尋ねてきたが、その目元には、楽しそうなからかいの色が浮かんでいた。それを見た苺は、上品すぎて気後れしてしまっていた藤原に対し、ちょっぴり親しみを感じた。

「う、受けたいです。よろしくお願ひしますです」

鈴木さん

明日から、どうのは無理ですか?

「あ、明日ですか？」

ええ。午前中にバイト先は辞職されて、午後から

一
レ
イ
シ
ン

「午後からが無理でしたら、ここに連絡してください」

藤原が差し出してきた名刺を苺は受け取った。

「それから 休みは月曜日と木曜日になります
かた 今週末は金曜日といふことで

「はい。ぜんぜん」

「住居は、間取りですかご希望はありますか?」

受け取った名刺を見ようとしたが、そう

「お嬢様、お嬢様、お嬢様！」

「ワンルーム……ですか？」

〔はい〕

「は
」

「笑つて」

不意をつかれ、苺はほかんとした。

「笑ってみてください」

こ、これは、営業スマイルの練習というやつか？ よ、よしつ。ここは思い切って、

梢一杯の営業スマイルを…

萬にはこと笑二た。

た。

こ、これって、何？

「では、鈴木さん、これからよろしくお願ひします」

立ち上がりつた藤原を見て、苺も慌てて立ち上がる。クエスチョンマークを頭に浮かべたまま、苺はペコペこと頭を下げるのだった。

6 緊急避難 ～爽～

「そ、それじゃ、あ、あの、これで」

店頭まで一緒についていった爽に、彼女はペコンと頭を下げる。

「ええ。明日の午後、お待ちしていますよ」

そう口にしてしまい眉を寄せる。いまの言葉、雇い主としては適切ではなかつたか。それでも、私にとつて、この鈴木苺は……単なる従業員ではないからな。他の者達とは態度や言葉遣いが違うものになるのは致し方ないだろう。

ペコペこと繰り返し頭を下げる苺はくるりと背を向けた途端、全速力で走り去つていつた。呆気にとられた爽は、彼女の姿が視界から消えてから、ようやく我に返つた。

面白い！

心の中で叫ぶ。

これは、パンダよりランクが上だな。突飛な行動が、私の興味を際限なくかき立てて

くる。たかが直接が、こんなにも楽しいなんて。

直接中なことが思い出され、噴き出しそうになる。自分の提示する雇用条件に、彼女ときたら、いちいちびっくり顔をするのだからな。

作り物ではない驚き、純粹な反応……なんというのか……心地いい。

それにしても、あの片えくぼ……あれは反則だな。あんなものを隠し持つていたとは思わなかつた。

笑顔になつた途端、出現したえくぼに、してやられた気がする。

あー、明日からが楽しみだ。早く明日になればいいのに。

胸が弾むという現象を愉快な気分で味わいながら、爽は踵きびすを返す。そのままスタッフルームに戻ろうとした彼は、要が自分を見ていることに気づいた。目が合つた瞬間、要是スマートに軽く頭を下げる。

こいつ……

冴えない彼女……鈴木苺が現れてから今までに至るまで、爽は彼女に気を取られ、他のことはすべて意識から消えていた。

彼女に声をかけ、履歴書を拾い、スタッフルームで直接をしたわけだが……

要は、爽とは違う意味で、これは面白いことになつたと思つてゐるに違ひない。爽は要に歩み寄つていつた。来ることがわかつてゐたように、要は爽を迎える。

「来い」

足を止めずに声をかけ、ふたりはスタッフルームに向かう。

「准社員として雇うことにして」

事務的に伝えた爽はデスクチェアに腰かける。

「そうですか」

「明日の午前中までに社員証と必要書類を揃えておいてくれ。彼女は明日の午後、来ることになっている」

「了解しました。では、明日の月曜日は、爽様も午後にはこちらにいらっしゃる。……ということですね?」

意味深な口調の要に内心むつとしつつも、爽は平静を装って「ああ」と答えた。

「仕事に戻ってくれ」

ノートパソコンを起動しながら要に命じる。

「爽様」

「なんだ?」

「準社員として雇われた、とのことですが……」

要は首を傾げながら口にする。

「それが?」

「あの方に対して、我々藤原カンパニーのスタッフは、今後どのように対応すればよろしいのでしょうか?」

即座に返答できなかつた。澄ました顔で爽の返事を待ち続けている要に、苛立ちが湧く。

「彼女は……」

そう口にしたもの、なんと答えて良いものかわからず口ごもる。要は軽く頷き、続きを待つてゐる。

「だからこの店の准社員だ。お前と怜をのぞく他のスタッフとは別物だ」

「つまり……それは……この店の、店長というお立場の爽様の部下であり、私や怜と並ぶ位置付けと、受け止めればよろしいのでしょうか?」

要や怜と並ぶ位置付けとは、藤原カンパニーを統括している爽の直属の部下といふこと。だが実際に、鈴木毒をそんな大層な地位に据えるわけではない。

「ああ、それでいい。それから言うまでもないだろうが……彼女の指導は、私が行う」

「わかりました」

要は頭を下げ、爽の前から下がろうとしたが、「爽様」と再び声をかけてきた。

「お名前を、お聞きしておきたいのですが」

「鈴木毒だ」

要は小さく頷いたあと、少し考えてから、「鈴木さん、と呼ばせていただこうと思いま

すが」と言う。

「ああ、それでいい」

「では」

頭を下げる要が店に戻ったのを確認し、爽はふっと息を吐いた。

有能なやつだが……それ以上に厄介なやつだ。とはいっても、その厄介さが気に入っているのだが……。おとなしく、言いなりになつていてるだけの部下では、つまらない。

口元に笑みを浮かべた爽は、パソコンのキーを素早く叩き、彼の所有している物件の中から、彼女に提供する住まいを探し始めた。

このショッピングセンターにほど近い、アパートかマンションというと、だいぶ数が限られるし、空室となればなおさら少ない。彼女はワンルームが希望と言っていたが、ワンルームに空きはなかつた。

2LDKしかないが……広いぶんには文句は言わないだろう。

突然、胸ポケットの中で、ビーツビーツという警告音が鳴り始めた。

即座に立ちあがつた爽は、ノートパソコンを閉じて脇に抱え、スタッフルームの裏口から飛び出した。

この警告音は、緊急を知らせるためのものだ。要が怜が、爽とすぐに連絡を取りたい

ときなどにも使用されるが……。今回は、まず間違いなく、祖母がやって来たのに違いない。

祖母が勝手に計画した、昼食会という名の見合いを無視したことに対する、文句を言うために。

店頭に出ていなくてよかつた。

爽はほつとしつつ、従業員専用通路を通り、外に出た。

羽歌乃が来てしまった以上、このままショッピングセンターの中にいるのは危険だ。爽を探してショッピングセンターの中を見て回るかもしれない。だが、こういうときの避難場所は確保してあるから、なんの問題もない。

避難場所であるマンションは、ショッピングセンターから車ですぐだ。パソコンも持つてきだし、仕事に支障はない。

マンションに到着し、部屋に入った爽は、まずはティータイムにしようと紅茶の準備を始めたのだった。

7 破顔で快走（苺）

二十五万……ワールーム……ボーナス二ヶ月分……二十五万……ワールーム……ボーナス二ヶ月分……

呪文のように繰り返し唱えていた苺は、背中に衝撃のようなを感じて、ふと立ち止まった。

「ちょっと!! あんたどうしたのよ?」

母の大声に、苺はビビった。

「なつ、何? どつ、どうしたの?」

節子が怪訝そうな顔を向けてくる。どうやら先ほどの衝撃は母の大声だつたらしい。ありよつ? 苺、いつたい、いつの間に家に戻ってきたんだ?

「どうしたのはこっちのセリフよ。さつきから呼んでんのに、ほけつとして、この子はあ」

「あ。ごめん。頭の中いっぱいでえ~」

そう口にした苺は、にへらつと笑つた。

「な、何よ、気味の悪い子ねえ」

「引っ越すの」

嬉しさのあまり、思わず口にしてしまう。

「引っ越すって、誰が?」

「わ、た、し」

リズムをつけて言う。

「はあ?」

怪訝そうな節子の顔は、非常に面白かった。

「あはははは」

「何を笑つてんのよ」

「だつて、お母さんの顔、面白……いてつ!」

「あほらし」

節子はそう言うと、苺に構わず、背を向けて歩いて行つてしまふ。

「お、お母さんってばあ」

引っ越しするつて言つたのに、なんで話を聞かずに行つちやうのだ?
苺は自分の部屋に向かおうとして、眉を寄せた。
そうだったよ。苺、いつたいいつの間に家に戻つたんだ?

思い出そうとしてみるが、まったく記憶がない。

ショッピングセンターの宝飾店
雇つてもらえることになつて……

給料が二十五万円で、ボーナス二ヶ月分で、ワンルームにタダで住めて……

な、なんか、現実味が急激に薄まつてゆくぞ。

シミツヒングセンタリ……
苺は腕を組んで首を捻つた。
行つたよね?

なんか、めちゃくちゃおいしすぎる話だよね？ ありえなくないか？

自転車漕いでショッピングセンターに行つたのは……夢じゃないよね？
苺は眉を寄せ、玄関でサンダルをつっかけると、そのまま外に出た。

ありよつ？ 母の愛車は？ バイト代で買ったピンクの……

庭のどこにも、苺の愛車はなかつた。

がする。なんて？あれ？ そういえは……萬 ここまで歩いて帰ってきたかような気

う、うそー、愛車置き去り？ もちろん、ショッピングセンターだよね？
どつと疲れを感じて、苺はその場こしやがみこんだ。

宝飾店での、突然の面接……あれは、夢か？ 幻なのかな？

慌ててスカートのポケットを探つてみたが、何も入っていない。

おつ、おかしいな。どこにやつちやつたんだろう？　バッグの中かな？
バッグを開けて探したが、それらしきものはない。くちやくちやの紙屑が転がつていいのを見て、苺は眉を寄せた。

「いちごう。お前、何してんだ？」

紙屑を取り出そうとしていた毒は、突然声をかけられ、ハツとして顔を上げた。兄夫婦が、じつと毒を見つめている。買い物から帰ってきたところらしく、健太は両手にレジ袋をぶら下げて、こ。真美は、バソアービナ。

お兄ちゃんは、妻に対してはやさしいよね……妹は子分扱いだけど……別にいいけど

「買い物、行ってきたの？」

「ええ。今日はおいしそうな鱈たらがあったから、野菜あんかけにでもしようかと思うの」「へーつ、おいしそうだね」

「真美は、何を作らせてもうまい」

「もう、健太さんつたらあ。苺さん、ピーマンともやし好きだものね。いっぱい入れてあげるわね」

「うん。真美さんやつさしいー、だーい好き！」

真美に飛びつこうとした苺は、ぐいと健太に襟首を掴まれた。

「う、ぐ、ぐ、ぐるじい」

「真美は妊娠なんだぞ、飛びつくんじやない」

叱られて、むつとする。

あーっ、この憎たらしい兄に、宝飾店の準社員になつたのだぞと言つてやりたい。給料が二十五万で、ボーナスが二ヶ月分で、ワンルームにただで住めるんだぞと自慢したい。けど……それが現実なのか、いまや定かではない。言いたくても言えやしない。

「健太さんってば、大丈夫よ」

「いや。お腹の子と君に何かあつたらいけない。注意しすぎるくらいがちょうどいいんだ」「もう、健太さん」

真美は夫の過保護っぷりをちょびり責めながらも、嬉しそうだ。ふたりの周りには、桃色のハートがぶかぶかと飛び交っている。……アホらしくなってきた。甘々シーンが展開されてゆくのをほけつといつまでも眺めていられるほど、苺は暇で

はないのだ。

彼女はふたりの横をすり抜けて、門に向かつた。

「おい、いちごう、お前こんな時間に出かけるのか？」

「自転車置いてきた」

苺は小さな声でぼしょぼしょ言った。

「は？ なんだって？」

「どこに？」

「ショッピングセンター」

苺はまたぼしょぼしょ言った。

「なんだって？」

「ショッピングセンターだよ！ 乗つてつたの忘れて置いてきちゃつたから、取りにいくんだよ！ 文句あつか？ ベーっだ」

むかつぎに任せて健太に舌を出した苺は、報復を受ける前にその場から逃げ出した。

「なんだあ、いちごうの野郎」という健太の声が、背後で聞こえた。

自転車なら五分で着くショッピングセンターだが、歩くと十五分ほどかかる。黙々と歩きながら、どうにも情けなくなってきた。

わたし、何やつてるんだろ？　でも、あの面接……現実だと思うんだけどなあ。結局、貰ったはずの名刺も消えちゃつてるし……けど夢じやないつて、苺。ほら、自信持ちなよ。

自分を一生懸命元気づけたが、苺の中の苺は返事をしなかつた。

ショッピングセンターによく通り着いた苺は、宝飾店に向けてトボトボと歩いて行つた。

遠くから宝飾店を窺うと、スース姿の男性が、お客様の相手をしている。

あのひとが店長さんだったつけ？　なんか違う気がする。……どうしよう？

さつき、面接してもらいました鈴木ですけど、わたし、採用してもらいましたよ

ね？　つて、聞く？

ちよつと、馬鹿っぽくないかな？

そう問答しているうちに、苺は避けることができない現実にぶち当たつた。

宝飾店の店員なんて、自分に務まるのか？

うわーっ！　わたし、店員なんて、生まれてこの方、したことなかつたよ。そのこと、ちゃんと言ふべきだつたんじや？

け、けど、店長さんは苺の履歴書を見たんだし……わたしが接客未経験なのはわかつ

ているはずだ。

不安に思わなくていいんだよね？　雇うつて決めたのは向こうだしさ……

なんでもいいから、もう一度やつてきた、もつともらしい理由を考えないと。

わたしがやつて来たのに気づいて、声かけてくれないかな？　顔さえ見てくれたら、きつと声をかけてくれるんじゃないかな？

よ、よし。

決心し、ごくりと唾を呑み込む。

わたしの顔を見て、なんの反応もなかつたら、あれは夢だつたつてことだ。そしたら回れ右して帰ればいい。

ためらしながら宝飾店に近づく。

そうこうしているうちに、目指していた相手と目が合つた。

ち、違う！

さつき面接してくれた藤原ではない。藤原は貴族のようなひとだったが、このひとは

お好みみたいに凛々しい顔立ちをしている。

凛々しいそのひとは、苺をじつと見て、さつと歩み寄ってきた。

カツカツカツと響く足音は、やけに迫力があつて、苺は身を竦ませた。

「どうなさいました？」

真顔で聞かれ、苺は動転した。

「あ、あ、あのつ。さ、さつきまで、店長さんがいて……」

「店長は、ただいま外出しておりますが」

「そつ、そうなんですか？ 失礼しましたあ～」

苺はしどろもどろに言い、後ずさりながら店から出ようとした。

「鈴木さん」

名を呼ばれたことにびっくりして、苺は足を止めた。

「なつ、なんでこのひと、わたしの名前知つてんだ？」

「鈴木さんですよね？ 明日から勤めていただくことになった」

その言葉は、苺を一瞬にして天国へとワープさせた。

ほら、ほらっ、ほんとだった。ほんとだったんだよ、苺っ！

二十五万円のお給料も、ボーナス二ヶ月分も、ワンルームも夢じゃなかつた！

「ありがとうございますっ！」

苺は勢いよく頭を下げ、凜々しい顔立ちをぽかんとさせている店員に背を向け、店の外までダッシュした。

すべて現実だよ。夢なんかじゃないんだよ。自信持つていいんだよ、苺。

苺は自転車置き場まで愛車を迎えていき、軽やかに飛び乗ると、破顔したまま家まで

快走したのだった。

8 食えない腹心（爽）

「爽様、いましがた、鈴木さんがおいでになりましたよ」

祖母が自分の屋敷に戻ったとの情報を得て店に戻った爽は、その要の報告に眉を上げた。

「それで？」

彼女との繋がりが、あっけなく切れてしまったのかと動搖しながら、爽は要に話の続きを催促した。

「話しかけてみましたら、爽様のことを探しておられるようでしたので、外出されないと伝えました」

「それで、どうしたんだ？」